

## 「子ども創作劇演習Ⅱ」に関する一考察

日 名 子 孝 三\*

### Abstract

This paper discusses how college women students who major in preschool education reacted to an assignment which asked them to freely create some expressions.

While searching for the possibility of this type of class, the authors have tried to study how these students understood their lives and appreciated the class, “Kodomo Sousakugeki Enshu II (Seminar of Children’s Creative Theater Arts).” The paper also reports how the students and teachers involved in this project viewed the creative process and how they defined the term.

**Key Words:** creative perspective performance

### 《概 要》

本学人間学部（主に保育心理専攻）の学生が現在に至るまで生活の中で培ってきたものを応用し、学生自身に白紙の状態から一つの表現を作り出すように課題を与えるとどのような表現が生まれてくるのか。また、そのような授業は可能なのかを試しつつ現代の学生が日常をどのような感覚で捉え、授業に接しているのかを「子ども創作劇演習Ⅱ」（保育の基礎技能Ⅴ）において行ってみた。本来創作とは、どのようなことを指して言うのか授業を通じて学生、教員双方が知ることに基本的な考えを置いてみた。

---

A study of “Seminar of Children’s Creative Theater Arts”

\*Kozo Hinago

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Women’s University,  
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533,  
Japan.

Accepted October 31, 2000. Published December 20, 2000.

## 《はじめに》

12年度、『子ども創作劇演習Ⅱ』を黒田浩一非常勤講師（専門領域音楽）と複数担当で行うことになり他領域同士の利点を生かし、学生の潜在能力を引き出すべく、新しいタイプの授業とそれに伴うシラバスを考え実行した。

### 1—(1) カリキュラムについて

授業の基本的な考え方と2人の教員の役割分担を考える。授業の基本となるものは、

- a. 学生自身が発想し、実行すること（創作）。
- b. 発表形態はまったく自由であること。
- c. 対象は、幼児であること。

したがって教員は、学生が起こしたテーマの進行状態を見ながら臨機応変に対応しなければならない。今日、学生の性質を考えた時白紙の状態からテーマを立ち上げるのは、授業時間数などを考えるとかなりの困難が予想されるが敢えて行うことは、学生、教員にとってまたとない実験の場であると思われる。

創造的表現を日常の中で考えた時、音、言葉、色、造形、動き、が浮かんでくるが、学生にどのように抑えた説明でイメージさせるかが問題である。筆者側の基本的考えは、教科としての領域を取り外す総合的な表現である。特に『子ども創作劇演習Ⅱ』では、黒田講師の専門領域である音楽、音、演劇発声法と筆者の専門領域である造形とを融合させることによって学生の考えたテーマのイメージを具体化し発展させるように援助する。

#### 授業概要として

a. 「パフォーマンスという名称で行われるものも含め、現代の公演、興行には新しい動きがたくさん感じられる。一つは、すでにでき上がったもの、完成の域に達したと思われるものの枠の中で創造的活動を行っている限り、限界がある。その枠をはずす、あるいは破ることで、新しい創造を生むことができる。それは人の生き方でもあり、現代社会の限界を破ることで、人間的な限界がなくなり、人間の根源的な力が復活して、新しい創造が可能になるという考えである。その結果、ふつう私たちが芸術という世界にも、新しい活動や作品が生まれている。<sup>(1)</sup>」

創作劇（必ずしも授業表題にとらわれる必要性はない）と言っても自己満足ではなく幼児の感覚に見合い、その場に合った臨機応変に対処できるパフォーマンス的要素を含んだ表現が望ましい。音楽、パネル・シアター、ペープサートなどの授業で指導を受けた表現基本にも、自

分たちなりの感覚，方法を取り入れ，従来からある方法に限定された表現ではなく日常の中にあるさまざまな諸動作，表情なども積極的に取り入れる姿勢を各学生に期待する。このことは，現在本学で学ぶ学生たちが日常をどのように観察し，日常から影響されているかを知る良い機会になると思われる。

b. 「音楽といえば，歌，器楽であり，独唱，独奏，合唱，オーケストラなどの合奏であり，他の芸術との総合的なものはオペラと思い込んでいた人々にとっては，音楽，美術，舞踊，演劇，などの枠そのものをはじめから考えず，全く新しい芸術作品をつくっている人々がすでに世界を舞台に活躍していることについて驚くであろう。」<sup>(2)</sup>

筆者と黒田講師が考えるこの授業における表現とは，基本的に a. b. に示されている考えに近いと言える。授業表題に固持することなく授業を行っていくには，筆者側もそれぞれの造形，音楽という領域をなるべく意識することなくお互いの考え方，意見を出し合いながら授業内容を立案した。音，色，言葉，形，動き，などが表現創作の基と考えられるがここでの考え方は，例えば一つの音に対してどのような色，形，言葉，動き，などが適切であるか探っていこうとするものであり，色，言葉，動きなどについても同様の考え方である。

「例えば，クラシックバレエと，現代舞踊のアルビン・エーリーを比べてみることでわかるだろう。児童劇の世界でも，関矢幸雄の演出による劇団「風の子」の作品「世界をまわるアニメイム」をはじめ「素劇」といわれるものなど，ほとんど衣装，装置なしに，自分の肉体を駆使して演じるものもそのような意味で注目されている。」<sup>(3)</sup>

「パフォーマンスを，日常よく使っているもので考えてみよう。例えば休日に街頭に若者たちが集まってのパフォーマンスがある。彼らは自分たちのできることを精一杯披露する。バンド演奏，寸劇，パントマイム，創作ダンス，スケートボードの曲乗り，新体操風な芸もある。」<sup>(4)</sup>

「その作品や実演の上手，下手よりも，本人たちがやるのが好きで熱心であることにまず意義を見いだしたい。

表現する楽しみを最もよく知っていて，実践しているのは，このようなアマチュアといわれる人々と幼い子どもたちではないだろうか。表現することが仕事でなく，楽しみのために表現活動をしていて，その楽しみを周囲の人々と一緒に味わっていく，という気持ちで，パフォーマンスになっていく。大変明るい活気に満ちたこの活動が，これからもますます増えていくように感じる。」<sup>(5)</sup>

以上の(3)，(4)，(5)，は，(3)を除いて町中でよく見る光景であり学生が町中に出ても目にしている筈である。学生たちの年代の感覚からすれば必ず好奇心や興味を惹かれているのではないだろうか。現在の社会環境に見られるさまざまな光景を学生たちがどのように捉え吸収してい

るかは、学生たちの表現の示し方によって、かいま見えるものと思われる。

また、上手・下手の問題について絵を描くということを例にとれば、

「描写力と表現力は二つで一つだと思いますが、いつごろからなのか描写力が上手・下手におきかえられ、上手いとか下手とかいうことが、大人の頭の中で絵などを見る時の基準になってしまったようです。風景を見ながら自分の感じとった形、色、構図で、その風景を表現し、自分の表現に必要な技術は、他人から教えてもらうのではなく自分自身で自分の表現に合った技術<sup>(6)</sup>を探すのです。」

まず、学生たちが自分で立ち上げ自分で表現すること。この際には、上手・下手の問題はなく必要に応じて自分の表現に合った技術を導入すればよい。技術優先ではなく、「やる気、何かを表現したい。」という意欲が優先する。以上をふまえた上でシラバスを立ち上げた。

## シラバス内容

### a. 授業科目の目的および概要

1. 子どもにみせる寸劇（パフォーマンス的要素も取り入れた）を創作、発表する。
2. 日常の、形・色・音・動き、等の融合を試みる。
3. 日常生活の中から、素材となる、材料・音・遊び、等の収集を試み、創作する。
4. 発表の形態は、自由である。
5. この科目は保育職に就く人のためには、保育内容に位置付けられる。

### b. 教育内容および授業の配分

この授業では、日常の中での観察、好奇心、等が立ち上げのポイントとなり、前向きで新しい表現を生むことを目的とする。

- 1) ~ 2) ガイダンス
- 3) ~ 7) 春の材料・音・遊び（手あそび、手話等も含む）他の収集・構成
- 8) ~ 12) 寸劇イメージ構成指導（演劇発声法等）
- 13) ~ 15) 授業内発表討論
- 16) ~ 20) 夏の材料・音・遊び（手あそび、手話等も含む）他の収集・構成
- 21) ~ 22) 保育現場への応用について（環境設定、演劇発声法等）
- 23) ~ 27) 秋・冬の材料・音・遊び（手あそび、手話等も含む）他の収集・構成
- 28) ~ 30) 最終イメージ構成指導、発表

### c. 試験・評価方法

出席状況、自分の研究成果の発表・収集・構成・討論への参加状況などを総合して評価する。

d. 使用テキスト・教材など

e. 注意事項

## 1 — (2) 評価基準について

各グループの表現作品にたいする評価基準は、次のように設定した。

- (1) オリジナル性（創作）
- (2) 主旨
- (3) 構成
- (4) 進行状態（完成度）
- (5) 音楽性（発声，リズム，など）
- (6) 造形性（色，形，など）
- (7) 演劇性
- (8) 全般的印象
- (9) 持ち時間
- (10) 幼児にとって，その作品が適切かどうか

予想される創作表現を考え上記の10項目からなる評価基準を設定してみたがこれらに当てはまらない表現が出てくることも考えられる。しかし，ここで最も重要な項目は，(1)のオリジナル性（創作）である。自分たちで考え創作し一つの表現を立ち上げていくプロセスが重要と考える。できぐあいを気にしたり，上手・下手を気にしたりせず自分たちの今表現したいことを，身体の動き，言葉，音，色，立体造形，他などを応用し遠慮なく表現していくこと。教員は，それらについてのアドバイスを行っていく。

シラバスの授業配分は，学生が表現を考えていく上での目印と考えてよく必ずしも内容に縛られる必要はない。ただし，この形態の授業にありがちな人任せ的な授業態度は厳しく指導する。問題は，学生がどのように創作というものにたいして積極性を見せ授業のリズムを構築していくかにかかってくる。また，グループ別に分かれることが予想されるがグループ内における意見の相違や前述した人任せ的な行為などによって内部分裂が起きることも予想される。

各グループの進行状態は中間発表以外にも質疑応答を積極的に取り入れ，学生同士でディスカッションを行い，お互いの意見から刺激を受けることによってイメージの展開が進むようにする。また，ディスカッションが苦手な学生にも言葉も表現の一つであると理解させる。教員は，学生のイメージがうまく展開する方向にアドバイスをを行うが，あくまでもアドバイスであり具体的な答えは，当授業に関する限りあまり望ましいとは言えない。

造形、音楽の技術的なものについては、随時相談に乗るようにし、イメージの具体化を円滑に行えるように援助する。色彩や音質などの感覚的な問題については、その都度表現されたものを見聞きしながらアドバイスをし、それらのことがらが保育現場の環境に適切であるには、どうすべきか繰り返し考察を行うことが重要である。

## 2—(1) 考察 a. カリキュラムについて

カリキュラムを立ち上げるにあたっての基本的な考え方は、授業表題にも示されているとおり「創作」ということが第一であると考えた。「創作」は、初めてか何も無いところから何かを作り出すということに他ならない。

したがって、学生自身に発想させ、実行させるということが重要であると考えた。教員は、技術的（感覚的技術も）なことがらにおいて創作表現にたいするサポートとして、教員自身の領域外でも可能な限り援助を惜しまない。筆者・黒田講師は、美術、音楽と通常では分かれて考えられるところであるが、本授業においては、各専門領域外でも知りうることについて互いの意見を交換し学生に提供することによってイメージを具体化するための推進力とした。発想形態は自由であるとし、授業当初において学生の作業状態を見ながら創作表現に関する広い意味での説明を行った。履修学生は、3年生が主で授業開始当初は、実習経験が浅く対象が幼児であるため現場環境への理解不足が目についた。ただし本授業は、通年であることから8・9月の現場実習の経験によって前期の理解不足も修正されるものと期待する。

## 2—(2) 考察 b. 授業概要について

保育現場の環境を考えてみた場合、幼児が主となるため援助者たちの計画通りにいかないことが常である。その場合臨機応変に対処しなければならず、場面場面には、柔軟な動きが必要となる。パフォーマンスという名称で行われるものの自由さは、保育環境に受け入れやすいのではないかと思われ、自分たちの創作に縛られることなく表現できる一つの方法ではないかと考える。これは、パフォーマンスの特徴でもあり、

「その枠をはずす、あるいは破ることで、新しい創造を生むことができる。」<sup>(7)</sup>という言葉にも見られるように、

「それは人の生き方でもあり、現代社会の限界を破ることで、人間的な限界がなくなり、人間の根源的な力が復活して、新しい創造が可能になるという考えである。その結果、ふつう私たちが芸術という世界にも、新しい活動や作品が生まれている。」<sup>(8)</sup>という考え方に基づいている。

さまざまな授業で指導を受けた内容を自分の創作表現、考え方に反映し取り入れられることが、「その枠をはずす、あるいは破ることで、新しい創造を生むことができる。」ということになると思われ、学生・教員相互で自分たちの日常を見直すことによって何かを再発見し自分たちの研究に新しいヒントを得るように授業の進行を図った。筆者の日常を見る目と学生たちのそれを見る目が違うように感覚的な面においては、尚更違うのではないかと。音、色など個人によって受ける感覚が違うものは、一つのテーマを与えたとしても関連づけて創作する場合、最終的に多種多彩な表現となっても当然であろう。音に色をつける、逆に色に音をつける、言葉に音・色、逆に音に言葉・色など考えればきりはない。ここで問題となるのは、分野として確立されたものの中で考えている限り、創造すること自体に楽しさを感じることもなく、その分野の仕事で終わってしまう可能性が強く、新しい表現は生まれにくいということである。学生たちには、「これはどの分野」と分けて考える前にあらゆる物事が創作表現の源である、という姿勢を筆者側が見せることが重要であると思われた。

## 2—(3) 考察c. シラバスについて

1. シラバス制作時においては、履修学生の人数が把握されていないため授業を行っている現時点で見ると不十分な内容となってしまった。基本的な授業にたいする考え方は入れ込んだつもりであるが、ポイントが日常の中からということにたいする説明文が必要だったのではないかと考える。
2. 「夏の材料・音・遊び」の項は、学生が休業時期及び実習期間であるため季節の音・材料が表現の中に出にくい可能性があるのではないかと現時点では考えられる。
3. 通年の授業であることから年2回の「授業内発表討論」「最終イメージ構成指導、発表」としたが学生の研究活動が活発であったことから頻繁に「進行状況発表」の時間をとる必要に迫られた。シラバスの内容については、当初教具・教材の関係から表現内容の規模が拡大することを考え5分程度の「寸劇」を基本において組んできたが学生のイメージの展開が予想以上に強く、平均10分以上の表現内容が大勢を占めてしまった。ただし、表現内容に関してあまり制約を設けることはイメージ及び技術作業などを乱雑にすることが考えられる。表現時間については再考が必要である。

## 2—(4) 考察d. 前期授業内容

他教科教員との授業であるが意志の疎通も完全であった。そのため授業における混乱もなく学生たちも積極的に行動した。履修人数等の関係で2コマ（月・金）に分かれ授業を行った。

予想はしていたものの、結果的に個人研究は皆無であったが作業量を考えた場合、個人では難しいと考えられる。グループは、22グループに分かれ創作作業を行う。創作過程を記録するため各グループにノートを用意させイメージの発想からグループ内の討論、実際の作業行程までのすべてを記録させる。このノートは、各テーマにたいする学生の思考過程が分かりやすく、また、現代の学生のものの考え方が表れ興味深い。学生がグループを組んだ場合に起こりやすい人任せ、グループ内のディスカッションについていけない学生は、履修3回目までに履修を断念せざるを得なかった。学生自身が立ち上げ実行する授業においては、全員が前向きの姿勢を見せない限り創作作業が中途半端なものになる可能性があり、他グループへの影響を考えた時、やむを得ないことと考える。

授業は、学生数との関係により39名・37名の2コマに分かれて行い、1グループ2～5名からなる計22グループを構成した。

グループA—アリ=学生がアリに扮して命の大切さを演じる。

グループB—しなの四兄弟=紙芝居的なもの。

グループC—きつつき=音階を上手く使ったコーラス+手を使った擬音。

グループD—カレーライス=歌+ペープサート

グループE—たい焼き=パネルシアター

グループF—身の回りの物で作った楽器=楽器+台詞

グループG—しりとり=造形物+台詞

グループH—ごみ=造形物+台詞

グループI—三匹の子豚=OHP 使用の影絵+台詞

グループJ—森の熊さん=ペープサート+台詞

グループK—カレー作り=パネルシアター+歌

グループL—楽器作り=ペープサート+創作楽器の演奏

グループM—怪獣の国=造形物+台詞

グループN—マジカルブック=造形物+台詞+作詞作曲+音響

グループO—虫歯=立体造形物+台詞+音響

グループP—三匹の子豚=造形物+台詞

グループQ—おおかみ=人形+造形物+台詞+歌

グループR—うさぎ=音響+歌+人形+造形物

グループS—いたずら=人形+造形物+台詞

グループT—洗濯=立体造形+人形+台詞

グループU—お片づけ=造形物+台詞+音楽

グループV—宝さがし=立体造形+台詞

各グループを内容別に分類すると

1. オリジナルな創作性、具体・抽象性も十分あり良く考えられているが、幼児に見せることを考えた場合に難しさが残るグループ—A・T・V

このグループに見られる特徴は、Aが3、4年生の混合、T・Vは3年生と編入生が途中で分かれて2グループになったものである。3年生で構成されるグループが多数を占める授業の中であって4年生・編入生がいるグループでは思考の仕方が若干違うようだ。全体的に3年生のグループは、分かりやすいのが特徴であり、編入生・4年生のグループは、難解であるのが特徴として印象に残っている。そのためかAグループは、4年生の創作にたいする考え方が3年生に把握されていない場面が見受けられる。T・Vグループは、授業開始当初同じグループであったが意見が異なり2グループに分かれたものである。編入生は、同じ3学年であるが短大修了者として完結を経験しているだけ大人という印象が強く、考え方もやや違ったのではないかと推察される。しかし、Aグループのアリの擬人化、T・Vグループの立体を使用した表現など3グループとも借り物ではない個性的な発想と表現を具体化していく精神力には、好感がもて後期授業が楽しみである。

2. テーマが幼児の躰に関するグループ—H・O

このグループは、「ごみ」「虫歯」など躰に関することをテーマとしたが、Hグループの「ごみ」は、やや幼児には難しいと思われる。もう少し色彩を考え、話の内容を整理する必要がある。「ごみ」問題を、なぜ海に設定したのか、場面設定にやや疑問が残った。Oグループの「虫歯」は、荒削りで乱暴な面もあるがスケールが大きく自分たちが楽しみながら表現しているのが良く分かった。構成は未完成であるが立体的である。内容を整理し時間をもう少し短縮していけば幼児に見せても飽きさせない創作表現だと思われた。中間発表で携帯電話を使用するなど意外性を見せ、筆者には無い感覚を学生から示された気がする。このような意外性が本授業の望むところでもある。

3. キャラクター、絵本などからの発想に頼る傾向のあるグループ—B・D・K・P

このグループに欲しいのは、自分たちにとっての基本的なオリジナルである。幼児＝絵本という発想なのか、シラバスに書いた主旨が、若干理解できていないのではないだろうか。努力の跡は見受けられるが原作を手本にした場合に原作を頼ってしまうため創作という観点から見た場合どうしても話の展開が弱く面白みがない。自分たちなりの解釈をしていかなければ進展は難しいと思われ、自分たちの日常に置き換えてみるような考え方の工夫を指導していく必要があるだろう。

4. 手あそび、ペープサート、パネルシアターなど、他授業において指導を受けた内容を自分たちなりに消化、創作し保育現場が意識にあるグループ—

C・E・F・G・I・J・L・M・N・Q・R・S・U

このグループは、全体から見た場合、他授業で指導を受けたものについて、初歩的であるが創作の中に応用ができていていると思われる。ただし、まだパネルシアターに必要と思われるリズム感、ペープサートを使用する場合、前後の遠近の取り方など、表現に応用できる技術が身につけていない感じがする。そのグループの中でもC・N・P・Qは創作性という観点から見て素晴らしい表現を示している。

グループCの特徴は、音階を上手く使ったコーラスと手を使った擬音にあると思う。環境への柔軟性を考えた時どのようにでも入っていきけるのではないか。見事なコーラスとリズムをとりながらの手を使った擬音は、幼児ばかりでなく老人ホーム等の慰問の際にも楽しんでもらえ、また、道具を使用しない表現として良く出来ていると考える。

グループNは、立体造形、言葉、作詞作曲、音、などを使い十分に練習を積んだ上で中間発表に臨んだと思われる。ほぼ本授業の主旨を理解し創作を行ったと思われすべての作業が完璧であった。作詞作曲された歌もとても素晴らしく黒田講師も感心されたようだ。発表を見ていた学生のすべてが、この創作表現に瞬きもせず見入っていた姿は非常に印象的であった。あえて苦言を呈すればやや就学児童向きでは、と思われるところもあり、後期、教育実習経験を積んだグループNがどのような新しい展開を見せるか大いに期待するところである。

グループPは、本授業全体の中で唯一OHP機器を使用したグループである。「三匹の子豚」を自分たちなりの解釈による表現を試みた。OHPがまだ十分に使いこなせているとは思わないが、むしろ、その不器用なところが機器を使用しても冷たさを感じさせない結果となったのではないか。黒い模造紙の三匹の子豚は、ナレーションの上手さと重なってユーモラスな雰囲気を見事に伝える側に伝えていたようだ。幼児にも楽しい時間を与えることが可能と思われる。道具としての機器も表現の中に積極的に取り入れることを望む。

グループQは、おおかみの人形、立体造形、言葉、音、などの組み合わせによる創作表現であったが、このグループも十分な練習の跡がはっきりと窺えた。無理のない歌に加えて台詞回しが良く、本人たちも楽しんで表現しているのがよく分かる。視覚的サイズも良く見やすい。当初終わり方に問題が見られたが中間発表では改善され幼児が納得すると思われる終わり方に表現されていた。このグループも教育実習後の後期授業においてどのような変化を表現してくれるか期待が持てる。

## 2—(5) まとめ

創作ということについて、まだ十分理解のできていない学生がいるが、それを仕方がないとは言ってられない。すでに出版されたり、公開されている絵本、演劇などをスタート（参考

ではなく)に置いている学生の考えは本授業の主旨からは若干それていると考える。本授業は結果とか上手・下手を問題にする授業ではなく、学生が自分自身で何をイメージし創作していくかの授業であり、自分のオリジナルを作る時間である。よって、すでにある創作表現を基本にしている学生には、再度自分自身で立ち上げ、創作という意味を問い直すように指導したい。

そして最も重要なことは、学生自身が如何に自分自身の問題としてテーマに取り組んでいるかであろう。白紙の状態からイメージを立ち上げ持続させながら、具体化していくことは大変な労力と精神力が必要である。まして、ほとんどの学生がグループで作業を行うとなれば尚更であろう。意見が合わなかったり、作業時間を一緒に取れなかったり、グループ内でしか分からない問題も出てくるであろう。しかし、グループで表現しようと決めたところから、すでに創作に入っていることを学生は理解すべきであろう。

上記した4グループ(C.N.P.Q)は、学生一人ひとりが他人任せではなく自分自身の責任において考え、作業を行った結果が見る側に満足感を与えたと考えて良いだろう。たとえ不完全であっても学生が楽しみながら創作し表現したものは、幼児が見ても何らかの感覚を受け取るのではないかと考える。

## おわりに

この授業を担当するにあたって一つの思いがあった。創作劇ということ考えた時それは、さまざまな形態、表現が自由に溢れ出て、見て、聞いて、楽しいものがイメージされた。創作とは、自分たちで作り出すことであるから多種にわたる表現が出てきても不思議ではなく、むしろ、その方が当然のことと思われる。この考え方を学生たちに徹底するのが教員側の最も重要な問題であると考えた。

枠をはずして分野にとらわれない表現活動を行うことは、自由で楽しいことである。これを授業で行ったら学生はどのような反応を示すか。誰の模倣でもなく自分が好きにイメージし、形にしていく。「あてがわれることになれてしまっている学生が白紙の状態から何を作り出すことができるか。」という考えの基、筆者と黒田講師で始めたこの授業は、少数の学生たちを除き全体の理解が早く、前述したような独創的な創作表現を行える学生も出てきている。ディスカッション形式も自然に行われるようになり、学生たちも労力を惜しまず、授業時間外においても創作活動を行うようになった。これらの学生によってこれから先どのような新しい表現が生まれてくるか期待を持つとともに、新しい時代の感覚を筆者も積極的に受け入れたいと思う。

### (注)

- (1), (2), (7), (8) 黒川建一・小林美実共著「表現」東京書籍 1994 p.23

(78) 文京女子大学研究紀要  
第2巻第1号

(3), (4) 黒川建一・小林美実共著「表現」東京書籍 1994 p. 24

(5) 黒川建一・小林美実共著「表現」東京書籍 1994 pp. 26~27

(6) 加藤怜子・日名子孝三共著「造形表現の指導」学芸図書 1996 p. 43